

保持期間と課題の社会性が展望的記憶に与える影響

小松 万里子

私たちは日常のなかで多くの予定を抱えて生活しており、日常生活の中で「し忘れ」の問題に困っている人は数多く存在するだろう。「し忘れ」は、個人の記憶能力とは別に、予定の内容にも影響を受けると考えられる。本研究では、予定の内容が「し忘れ」すなわち展望的記憶の失敗に与える影響に着目する。

本研究の目的は3点あり、1点目が課題種類と保持期間の長さ、および課題の社会性が展望的記憶に与える影響について検討することであった。2点目は、展望的記憶の想起段階を区別し、存在想起と内容想起における成績について検討することであり、3点目は展望的記憶能力と回想的記憶能力との関係について検討することであった。

本研究では、日常生活における「し忘れ」を実験室場面で再現するため、パソコンを用いて、日常生活を模した仮想上の1日を過ごしながら、途中で提示される予定を記憶し、適切なタイミングで実施するという展望的記憶課題を作成し、実施した。予定の内容には、課題種類(時間ベース、事象ベース)、保持期間(短期、長期)および課題の社会性(社会的、非社会的)の要因を設定した。本研究では、課題種類について、時間ベース課題を特定の時刻をきっかけとする予定、事象ベース課題を特定の行動や場面をきっかけとする予定とした。また保持期間については、短期条件を記憶した当日に実施する予定、長期条件を記憶した翌日に実施する予定と設定し、各日の間に N-back 課題を挿入することで各条件を明確に区別した。課題の社会性については、社会的課題を忘れてしまうと他者に影響を及ぼす可能性のある予定、非社会的課題を忘れてしまっても自分自身にしか影響が無い予定と定義した。

実験Ⅰでは、課題種類と保持期間の2要因が展望的記憶に与える影響について検討した。実験Ⅱでは、実験Ⅰの問題点を改善した上で、課題の社会性の要因を追加し、実験Ⅰと同様の実験を行った。

実験Ⅰ・Ⅱの結果から、各要因が展望的記憶に与える影響について以下にまとめる。まず課題種類は、他の要因との組み合わせに関係なく展望的記憶に影響を与え、事象ベース課題では予定の実行のきっかけとなる視覚的な外的手がかりが得られるため、時間ベース課題よりも正答率が高いことが示された。次に、本実験のように物理的な時間の長さが数分間と短い場合には、保持期間の長さは展望的記憶に影響を与えないことが示唆された。また、課題の社会性は他の要因との組み合わせによって展望的記憶への影響の仕方が異なることが示唆された。さらに、二つの要因の組み合わせが展望的記憶に与える影響について検討した結果、各要因で正答率が高い傾向にある事象ベース課題、短期条件、社会的課題の条件が、正答率に強く影響を与えることが示唆された。以上から、本研究で得られた知見を実際の日常生活の場面に当てはめ、予定の立て方におけるし忘れの予防策について提案した。

また実験Ⅰ・Ⅱを通じて存在想起と内容想起について区別し、それぞれの想起の成功と失敗で4つの回答のタイプに分類して想起の失敗について検討した結果、回答のタイプについては課題種類や保持期間の影響よりも、個々の予定の文章や、他の予定の内容との類似性による影響が大きいということが示唆された。

さらに、展望的記憶課題成績と回想的記憶課題成績との関係については、実験Ⅰ・Ⅱで異なる結果が得られたことから、展望的記憶は想起段階で分けて展望的記憶要素と回想的記憶要素として捉えることが可能であるかという点については、再検討が必要であるといえよう。(応用行動学・ボランティア行動学)